フィールド案内・地ごしらえ

§　多摩の森大自然塾 鳩ノ巣フィールド連絡協議会

2003年、都の森づくりイベント「多摩の森大自然塾」の1開催地「鳩ノ巣フィールド」を運営するために発足。運営参画の意志を持つ団体と個人によって構成され、当フィールドの活動方針、森林計画の策定といった運営の骨格部を担当する他、メンバーは指導者として各回のイベントのスタッフ役を務める。

フィールド案内で作業への理解をアップ

都の北西端に位置する奥多摩町は、四方をスギを中心とする森林に囲まれた山村です。都心からはJRで1時間半以上かかりますがフィールド*1は青梅線鳩ノ巣駅の目の前です。今日の作業は、来月に開催される植樹祭のための地ごしらえです。参加者は体験（初参加者など）と実践の2コースに班分けされており、体験コースでは、作業前に現地でフィールドの概要や山仕事について簡単なレクチャーを受講します。開塾式では、班長の指示に従うこと、休憩は適宜とって構わないこと、怪我のないようにといった注意事項があります。体操を終え、フィールドへ出発です。

フィールドは結構な急傾斜地です。体験コースの一行は班長らの先導で、当塾手作りの作業道を慎重に登ります。班長らから、薪炭林であった当地は拡大造林を機にスギ・ヒノキの造林地に変化したこと、手入れ不足で荒廃した森林は表土流出の危険があり、間伐などにより林内の光条件を改善して下草を生やす手入れが必要といった解説があります。

斜面を上がると2mほどの高さのネットを筒状に巻いた植林地が見えてきます。この一帯は昨春に森林所有者の理解を得て、コナラやイロハモミジ、ヤマブキなど、実がなったり開花や紅葉の美しい広葉樹を植栽した箇所です。ネットはシカの食害や角こすりを防除するための資材で、都の林業試験場の協力のもと導入されました。当フィールドでは、森林計画にうたう多様な森林を造成するため、こうした森林防除にも様々に知恵を絞っています。

斜面の中腹にある薬師堂では、地元の人と一緒にお祭りをしたり、年頭の活動日に作業の安全祈願をしています。

日程（体験ｺｰｽ）　：2004年2月15日

開塾式・準備運動	10:00
移動・フィールド案内	10:15
作業開始	11:20
昼食	12:05
作業再開	12:50
作業終了・移動	14:45
道具手入れ	14:50
アンケート記入・感想発表	15:00
閉塾式	15:20
解散・スタッフミーティング	15:30
スタッフ解散	15:40

参加者40名（参加者28、ｽﾀｯﾌ11、町民1）

● 当日の分担・配置
参加者：体験 / 実践コース（各ｺｰｽ2班）
スタッフ：
統括責任者;挨拶、組織間連絡調整
指導責任者;進行、班長・班長補助統括
班長・班長補助;ﾌｨｰﾙﾄﾞ案内、班作業進行、安全・技術指導
事務局；受付、アンケート集計

● 使用した主な道具・物品
鋸、鉈、かけや、ブラシ、洗剤、ウエス

▲ シカ防除ネット。

▲ 薬師堂。休憩地としての利用も。

＊1　25～70年生のスギ・ヒノキ人工林と皆伐跡地よりなる一般民有林で約10ha。今回作業した林分はスギの皆伐跡地約2ha。2002年度より地ごしらえと植栽を開始し、今年度の植樹祭では520本程の広葉樹の植栽を計画。

植樹祭にむけて残材を整理

植樹祭会場となる林分には、伐採後に放置されたスギの枝条が散乱しています。これを整理して植栽場所として整えるのが今日の作業です。まずは道具の扱い方の基本を学習します。班長から、鋸は刃の先2/3が、鉈は逆に刃の手前の2/3がよく切れること、鉈は必ず木を挟んで体の反対側で使うことといった解説があります。班長の実演に倣って、早速参加者は残材の山から枝条を鋸で切り出し、鉈で枝を払います。その表情は真剣そのものです。

黙々と手を動かす参加者に、班長らが「鋸はもっとゆっくり挽いていいですよ」、「自分の手に負える太さの枝を選んでくださいね」と声をかけます。短く整理した枝条は木杭で棚を作って等高線上に積み上げ、小枝や葉は植栽した苗の乾燥を防ぐカバーとして地表に残しておきます。フィールドには、「ジャリジャリ」と鋸を動かす音、「カンッ、カンッ」と木杭にかけやを振り下ろす音が響きます。下方の集落からは風に乗って鶏の鳴き声も聞こえてきます。

昼食を挟み、午後からは今日仕上げる目標を定め、全班が作業箇所を集中させて作業を継続します。上下の作業を避けて、参加者は横に広がり、左右の間隔を確かめながら作業を進めます。集めても集めても減らないよう見えた残材の山も、マンパワーで徐々に片づいていきます。地元の林業家もチェンソーを手に加勢に訪れ、ひときわフィールドが活気づきます。

「ピーッ」という笛の合図で作業は終了。「一日作業したら斜面が平らに見えてきたわー」という女性に、「慣れですねー」と一緒に作業していた事務局スタッフが答えます。

麓の駐車場に戻って道具の手入れです。フィールドを見上げると、今日の作業箇所がきれいに整理されているのがわかります。閉塾式では、地ごしらえに続いて行われる植樹、下刈り作業への参加のお誘いもあります。新たにつくる森の姿に夢がふくらむ一日でした。

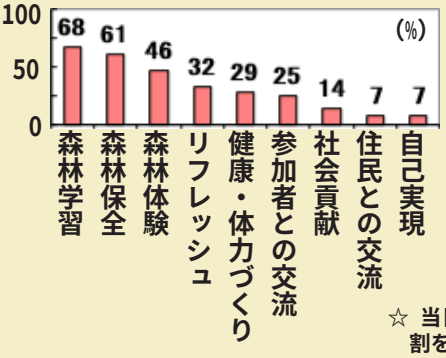
▲ 刃は「スッ、スッ」とリズム良く動かすのがポイント。

▲ 木杭に横木を渡して棚を作り、残材を集積します。

▲ 刃の松ヤニをきれいに取り除きます。

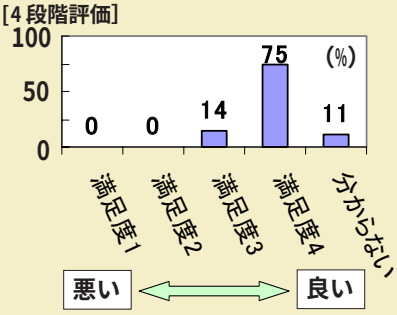
参加者の声から

本イベントに参加して満足した点は（複数回答3,N=28）？



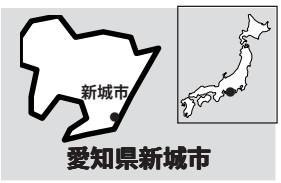
「初参加だったので、フィールド案内がありがたかった」
「鉈の使い方などを改めて学び、自己流が直って良かった」
「今度は植樹祭に参加したい」
「作業が気持ちよかった」
「当フィールドにまた参加したい」
「参加者の交流がもっとほしい」

イベントの総合的評価は(N=28)？
[4段階評価]



☆ 当日は森林学習と森林保全を行えたことに満足を感じた参加者が多かったこと、7割を超す参加者が当イベントを総合的にみて「良かった」としたことがわかります。

間伐



§ NPO 法人 穂の国森づくりの会

1997 年、東三河豊川流域の市民、企業、行政が「水源の森」、「地域づくり」を求心力に参集して発足。「75 万人（流域内総人口）の森づくり」をスローガンに各者が連携し、教育、政策提言、森林認証など、森を守り育て活かす活動を多様に実践する。会員数約 800。

教育活動のためにフィールドを整備

静岡県境に位置する甚古山国有林のフィールド*1は、豊川流域南部の小学校に野外体験学習（下コラム）を提供するために利用している場所です。今日は、「間伐体験」のプログラムを補完するため、急傾斜地など小学生が作業しづらい部分の間伐を会で前もって行い、林内の整備を進めます。道具小屋の前には、プリティフォレストクラブ*2のメンバーが集合しました。

朝の打ち合わせでは、作業内容を皆で確認し、経験の長いメンバーを解説役としてミニ伐倒教室を行います。教室では、模式図を用いて、受け口と追い口を入れる要領やツルの役割を復習します。また、「ツルを残さない伐倒や待避の遅れによって死亡事故の例がある」、「伐倒時は必ず合図をすること」、「かかり木処理で周囲に協力を求めるのは恥ずかしいことではない」と、安全作業の徹底についても強調します。打ち合わせの最後には初参加のメンバーの自己紹介もあります。皆でフィールドに移動します。

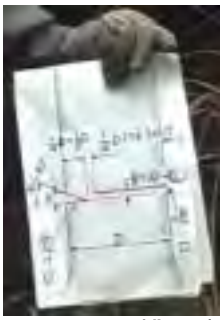
日程	：2004 年 12 月 19 日
日程・作業内容確認	10:00
移動	10:20
現地到着・作業開始	10:35
移動	12:05
昼食．アンケート記入	12:15
移動	13:10
作業再開	13:30
作業終了・移動	15:00
後かたづけ・解散	

参加者 10 名

● 当日の分担・配置
会員：間伐
ｽﾀｯﾌ：事務局；日程・環境掌握、救護

● 使用した主な道具・物品
鋸、鉈、チェンソー、ナタ、ロープ、フェリングレバー、トビ

▲ 伐倒方法を復習。右端は解説役の寺島さん。



▲ ツルは蝶つがいの役割をします。

森林教育活動*3：子ども達に森を学ぶ体験を

当会は、次代を担う子ども達に、森林の手入れの大切さや森林の素晴らしさ、生態系の仕組みなどを伝えるため、奥三河地域の小学校5年生を対象に、野外体験活動と屋内講義形式の訪問授業を実施しています。

野外体験活動では、豊川上流域の国有林2箇所を舞台に、愛知森林管理事務所とともに植樹、間伐などの林業体験、自然観察などのプログラムを提供。例年、教育委員会を通じて希望校を募集しますが、対応可能な件数（2003 年実績 9 件）を上回る程の反響があります。

▲ 甚古山での間伐体験*4。

＊1 該当林小班は約 3ha。ヒノキ 27 年生。協定は締結せず、3 年間で当地の作業を終えることを条件に利用。

＊2 フィールドを固定して育林作業を行う会のサークル活動。会の移動型の育林作業のリピーターにより発足。

＊3 68 ページ参照。

＊4 中部森林管理局名古屋分局 HP より。

現場への道のりはなかなかの傾斜地です。チェンソー、フェリングレバーなどの道具をメンバーが手分けして運びます。現場は斜面下部が急傾斜、上部は比較的平坦な地形のため、上部を小学生の作業場所とし、今日の作業は下部から伐り進めることを確認します。

林内のヒノキは直径が15～20㎝とあまり成長が良くありませんが、幹が太すぎないことが逆に好都合で、小学生の体験にも利用できる林分となっています。林内は愛知森林管理事務所の協力で事前に選木が終えてあり、メンバーはコンビを組み、鋸やチェンソーを使って伐倒をすすめます。

▲　白いテープは間伐対象木の印。

かかり木処理はロープワークで

混み合った林内では、鋸を入れた木は、周囲の木と枝が絡まり合ってなかなか倒れません。しかしそこは冷静に対処。メンバーはかかり木になった木の幹にロープで細い丸太を巻き付け、てこの原理を応用しながら、じわじわと少しずつ木を動かし、枝の絡まりを外していきます。幹が八割がた傾いたら、最後はマンパワーです。「そーれっ」というかけ声とともに、メンバー2人は幹を思い切り押し倒します。「ミシミシ…」という音と共にようやくヒノキが地面に倒れました。メンバーからは「今日は暑いねー」との声があがります。一部の材は利用しますが、間伐木はチェンソーで玉切りをして、等高線に沿って揃えておいておきます。

▲　てこの原理で幹をねじって徐々に移動させます。

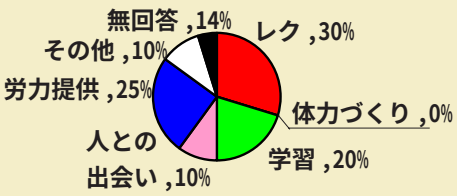
休憩中や作業の合間に、メンバーからは「森林づくりのおもしろさは、木が倒れるときの爽快感」、「森に手を入れることで、土壌の流出を防ぎ、森の保水能力を高めたい」、「仲間とのやりとりも面白く、勉強になる」との声も聞くことができました。メンバーは様々な思いで活動に取り組んでいるようです。

昼食をはさんで間伐作業は午後も継続し、フィールドに小学生を受け入れる準備が整えられました。

▲　ツルがうまく働きました。

参加者の声から

参加目的は（複数回答2,N=20）？

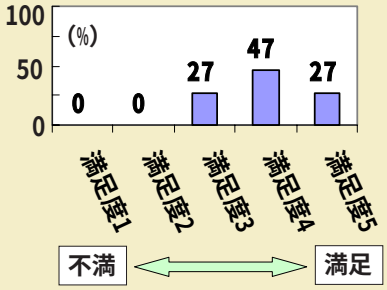


「この美しい日本の自然を守りたい」
「自然と接することは非常に気分爽快で健康的」
「参加者の幅と数を増やしたい」

今日の目的達成度は（同右）？
［5段階評価］

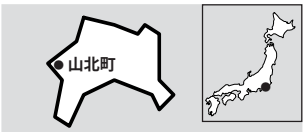
項目	達成度	人数	(%)
レクリエーション	3	2	10
	4	3	15
	5	1	5
学習	3	3	15
	5	1	5
人との出会い	2	1	5
	3	1	5
労働力提供	2	1	5
	3	2	10
	4	2	10
三河湾浄化等	1	1	5
CO_2問題	2	1	5
無回答		1	5
合計		20	100

今日の満足度は（N=10）？



目的達成度4以上比率：35%
当日満足度4以上比率：73%

☆ レクと労力提供を目的とする回答者が多く、高い達成感を得た人はレク目的の人に多く、約7割の人が高い満足感を得たことがわかります。



神奈川県足柄上郡山北町

間伐・枝打ち・薪割り

§ 森林クラブ

1983年、育林体験や自然教育を行う市民サークルとして発足。「自分たちの森をつくりたい」と1985年より国有林の分収造林制度を利用して造林作業に取り組む。フィールド別に「下仁田」と「横浜/丹沢」の2部会があり、作業の傍ら、子どもキャンプなど森に親しむ活動を多様に展開。会員数75名(2003年度)。

造林したスギの手入れをすすめる

フィールド世附(よづく)国有林は、西丹沢の西端、静岡と山梨の県境近くに位置する自然豊かな森です。会は1986年に所管の旧営林署と分収造林契約を結びスギ・ヒノキ1.1haの造林を継続しています。

1日目の正午前、拠点施設「水の木小屋」には県内都市部や他県からマイカーやクラブ車を利用してメンバーが集合*1。昼食後のオリエンテーションでは、活動時は環境負荷を与えない生活と自己責任を心がけて欲しいといった案内やメンバーの自己紹介があります。この日の午後はスギ林の手入れを行いますが、滞在中のプログラムは基本的に参加が自由です。造林や小屋補修などの作業は全てメンバーの自発性に基づいて実行されています。

スギは植栽（密度3,000本/ha）後15年が経過し、枝打ちや間伐を行っています。メンバーは作業種別にグループに分かれ、間伐担当は3人が交代で伐倒を進めます。世話人(役員)で活動経験の長い網谷さんが、木同士が競争の状態にあること、曲がった木や細い木など形質の悪い木を伐採して残った木の成長を促す必要があるといった間伐の意義や伐倒の要領を説明します。

林内はなかなかの傾斜地です。伐倒方向を確認したメンバーは足場を確保して、まずは受け口切りから慎重に鋸を動かします。「もうすこし刃を平らにしてみて」と網谷さん。今回は入会して1年未満の参加者が多く、基本を確かめながらマイペースで作業を進めます。6～7本の伐倒と玉切りを終えると、早くも2時間が過ぎています。2月とはいえ作業時に寒さは全く感じません。「ちょっと汗をかくくらいが森林浴にちょうど良いですね」と網谷さん。他のグループは、ムカデ梯子を用いて高さ4mまでの枝打ちを進めています。林内は随分見通しよく明るくなりました。

日程　：2003年2月22日～23日

小屋到着・掃除	22日	11:40
昼食		12:00
オリエンテーション		12:25
準備・身支度		13:00
フィールドへ移動		13:30
作業（間伐・枝打ち）		13:50
小屋へ移動		15:55
夕食準備・夕食・入浴		16:10
就寝		23:00
朝食準備・朝食	23日	8:00
山の神参り		9:30
作業（薪づくり）		10:00
昼食準備・昼食		12:35
後片づけ・アンケート記入		14:25
掃除		15:25
小屋出発・解散		16:00

参加者9名

● 当日の分担・配置
会員・参加者：間伐、枝打ち、薪づくり
世話人：日程・環境掌握、オリエンテーション、会計

● 使用した主な作業道具・物品
鉈、鋸、梯子、マサカリ、ロープ

▲ 食堂にて自己紹介。

▲ 間伐の様子。

＊1 「水の木小屋」は営林署の旧作業宿舎を会で整備して借り受けている。造林地へは約2km。また、JR利用者のアクセスのため自動車を購入して会所有（クラブ車）とし、最寄り駅に駐車場を確保、フィールドとの往復に役立てている。

山の神にお参りして幸せを祈願

2日目は小屋のそばの小さな神社にお参りをします。お祀りされているのは山の神で知られる大山祇命（おおやまつみのみこと）です。まずは塩で周囲を清め、社の扉を開けて御神酒とお赤飯をお供えします。この段取りは山の神研究を趣味としている佐藤さんによるもの。佐藤さんが大きな声で祝詞をあげる様子はちょっとした神事のようです。メンバーは健康や子供の受験の成功等々各自の望みを元気よく山の神にお願いします。最後は佐藤さんが「おぉー、山の神よ、みんなの願いを聞いてくれ」と締めくくります。山の文化に触れる貴重な体験となりました。

▲ 祝詞をあげる佐藤さん。

使った薪を補充

午前中の作業は薪割りです。小屋では風呂とストーブの燃料に薪を使用しており、今回の滞在で使った分を補充します。地元から譲ってもらった廃材を鋸で切り、マサカリで二つ割にします。メンバーがマサカリをふるうと「カツッ、カツッ、パシッ」っと小気味よい音と共に薪が真っ二つに。薪割りの技術はやはり経験がものをいいますが、経験皆無の若者（取材者）でも、メンバーの助言で徐々にマサカリを薪へと振り下ろせるようになります。刃が小口に食い込めばしめたもの。薪ごと刃を振り下ろせば100%薪は割れます。

メンバーが交代で腕を振るう自炊の昼食を済ませ、小屋の掃除を終えて活動は終了。今回も豊かな自然体験ができた滞在となりました。

▲ 薪割りはお手のもの。

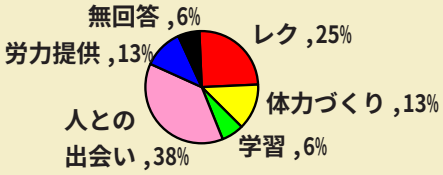
水の木小屋の生活:豊かな自然を堪能

丹沢の活動の魅力の一つはその豊かな自然です。造林地の他、所々にブナなどの大径の広葉樹が生い茂り、豪快な滝が随所にあって、富士の絶景が見られる峠も程近くです。小屋の飲料水は名水とされる丹沢のわき水を利用しています（水質検査済）。小屋付近に人家はなく、近所を気にすることなくイベントやバーベキューも存分に楽しめます。一方で、水源地で生活する責任として、なるべく汚水や汚染源となるゴミを出さない姿勢も求められます。そして小屋の生活を豊かにするものは、電化製品ではなく、自然の恵みとメンバーの知識や技術です。自然と自分との距離が近い水の木小屋の生活は、都市生活を振り返る刺激にあふれているといえるかもしれません。

▲ わき水を貯水して不純物を沈殿させ、飲料水としています。

参加者の声から

参加目的は（複数回答2,N=16）？

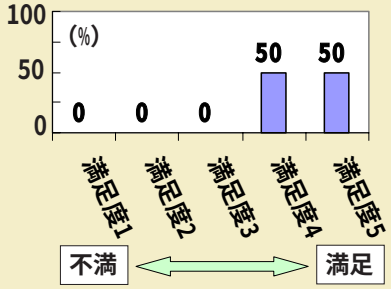


「長期的な活動を行うには、施設等の基盤整備に行政・民間支援が欠かせない」
「仲間と一緒に活発に活動してスキルアップを図りたい」

今日の目的達成度は（同左）？
［5段階評価］

項目	達成度	人数	(%)
レク	3	1	6
	4	2	13
	5	1	6
体力づくり	3	1	6
	5	1	6
学習	4	1	6
人との出会い	3	1	6
	4	3	19
	5	2	13
労力提供	3	2	13
無回答		1	6
合計		16	100

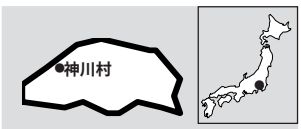
今日の満足度は（N=8）？



☆ 当日は人との出会いを目的とする参加者が最も多く、この目的での達成感も高いこと、全員が高い満足感を得たことがわかります。

目的達成度4以上比率： 56%
当日満足度4以上比率：100%

施設整備・紅茶・石けんづくり



埼玉県神川村上阿久原

§ NPO 法人 埼玉森林サポータークラブ

1997年、県民参加の森林づくりを推進する県の呼びかけに応じた有志により発足。奥山や平地林の整備の他、森林・林業への理解を広めるため、山村地域との交流イベントや森林文化の継承に取り組む。活動地は県内全域、富士山にも及び、複数箇所で活動を同時開催することも珍しくない。会員数約 700。

イベントに向けて施設整備・紅茶づくり体験

朝8時30分、くるみ小屋（次ページコラム）にメンバーが集合します。メンバーの多くは県南部の都市住民ですが、片道2～3時間をかけて、県の北西端、群馬県に隣接する神川村まで月1回通ってきます。くるみ小屋のリーダー、小田村長らは前日から小屋に滞在し、草刈りや雨樋補修など整備を進めています。今日は来月開催する地元の子ども達対象の「木工教室」の準備のため、周辺施設整備とプログラムの企画、そして紅茶づくりと石けんづくりに取り組みます。また、かねてから交流のある洋画家、東京の美大生らと合流し、10日ほど前に小屋周辺の山林内にある焼き物窯に入れた陶器作品の焼き上がりを確認します。

まずはストレッチ体操を兼ねた薪運びです。男性陣はかけ声宜しくストーブ用薪材をリレー式に作業小屋へ運搬します。子ども達を迎えるにあたっては、整理整頓が安全管理の第一歩。小屋周辺の枝条や残材をまとめ、不要物は焼却します。あわせて新しいトイレも設置します。残材の整理を終えた後は、会で力を入れているクラフト、編みザルの素材となるササなどを栽培する花壇作りです。間伐材をチェンソーで切りそろえ柵状に組みたて、樹皮をむきます。小屋周辺の環境が次々と整えられていきます。

女性陣は茶摘みに出発です。小屋周辺の40年生ヒノキ林にはかつての茶畑の名残で茶が生えています。会ではこの茶木の活用を試み、紅茶づくりを始めました。茶葉は夏越しの葉が香りが高く紅茶向きで、朝のうちに枝先端部の今年新しく出た葉を選んで摘みます。こうして摘んだ茶葉は、風通しのよいところに陰干して、揉んで発酵させた後、地元の喫茶店からオーブンを借用して乾燥させ、1日がかりで紅茶に仕上げます。

茶摘みと花壇作りが一段落し、メンバーが作業小屋で休憩しているところに、美大の一行が到着しました。

日程	：2004年9月18日
日程・作業内容確認	8:55
薪運び・周辺整備	9:20
茶摘み	9:45
休憩・美大一行到着	11:00
出窯	11:20
昼食・木工教室企画	12:30
作業再開	13:00
石けんづくり	13:30
道具手入れ・後かたづけ	14:00
アンケート記入	14:20
順次解散	14:50

参加者 32 名（会員 17、美大関係者 15）

● 当日の分担・配置
会員：施設環境整備、紅茶・石けんづくり
役員：日程確認、進行
美大関係者：窯出し先導

● 使用した主な道具・物品
施設整備；チェンソー、皮むき、鋸、鉈
紅茶づくり；茶葉、ザル、ポリ袋、揉み板、ボール、鍋、オーブン
石けんづくり；廃油、苛性ソーダ、水、バケツ、棒、杓子、漏斗、紙パック、計量カップ、ゴム手袋、マスク

▲ 花壇となる柵の皮むき。

▲ 紅茶用の茶葉を摘みます。

美大生と一緒に陶器の出来映えを確認

当フィールドの所有者である浅見さんと連携して、芸術家とその卵達が柱を組み、煉瓦を積んで造った窯は７月に完成したばかり。会員もくるみ小屋建築で得たノウハウを活かして作業を手伝いました。先月には一緒に粘土で作品を作り、窯の火入れ式を実施しています。今日は窯を開け、初窯の記念作品の出来ばえを確認します。

「まだ窯が熱いよ！サウナみたい」
「わー、壊れて残骸ばっかり」
「やったー、僕のはできてた！」

次々と窯から出てくる小鉢や皿といった作品の焼き上がりは様々で、自分の作品が見つかると歓声が上がります。オリジナルのマグカップやグラスは早速お昼の食卓で活躍します。

▲ 手作りの焼き物窯。

▲ 作品の出来映えは？

石けんづくりを体験

昼食の後は、石けんづくりです。これは小屋の廃水の環境負荷を考慮し、合成洗剤に替わる洗剤が欲しい、と企画したものです。水に溶かした苛性ソーダに、天ぷら油などの廃油を加え、20～30分根気よくかき混ぜます。メンバーはマスクとゴム手袋で完全装備。劇薬である苛性ソーダの取り扱いには注意が必要です。液がどろりとしてきたら、漏斗を使って紙パックなどの型に流し込みます。成型後１週間ほどで石けんは完成。軍手の洗濯などに重宝しそうです。

来月の木工教室は竹馬づくりを中心としたプログラムが発案され、滞在組のメンバーは今日も小屋に宿泊して、企画の準備を続けます。

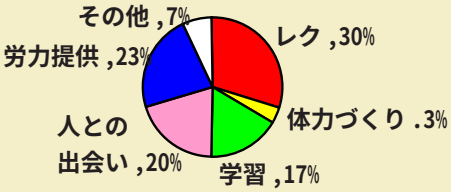
▲ 静かに液を型に流し込みます。

くるみ小屋：本業を活かしたボランティア活動の展開

当フィールドの所有者で地元の林業家である浅見和夫さんの協力のもと、作業や地域交流の拠点として、フィールド内に会手づくりで建築した施設。浅見さんの林産加工の技術指導に加え、建築士や大工といった会員が本業で培った能力を総動員して、玄関フロアやテラス、クラフト展示棚など、外装、内装とも趣向を凝らした立派な小屋が整えられました。現在も風呂小屋の建築など、くるみ小屋の施設は充実し続けています。

参加者の声から

参加目的は（複数回答２,N=30）？



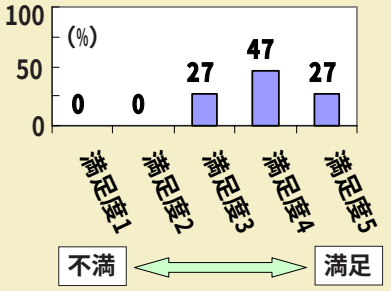
「森林の造成方法を学びたい」
「森林への理解を多くの人々に広めたい」
「活動に熱中する主人に連れられて参加。夫婦の時間を大切にしたい」

☆ 当日はレクを目的とする参加者が最も多く、約７割の回答者が高い達成感と満足感を得ていました。

今日の目的達成度は（同左）？
［５段階評価］

項目	達成度	人数	（%）
レク	3	1	3
	4	3	10
	5	5	17
体力づくり	4	1	3
学習	3	2	7
	5	2	7
人との出会い	4	3	10
	5	2	7
労力提供	2	1	3
	3	2	7
	4	2	7
	5	1	3
夫婦の時間	5	1	3
森林理解促進	2	1	3
無回答		3	10
合計		30	100

今日の満足度は（N=15）？



目的達成度４以上比率：67%
当日満足度４以上比率：73%

拠点施設整備・クラフト

香川県高松市西植田町

§ NPO 法人 どんぐりネットワーク

1994年、県事業「どんぐり銀行活動*1」の運営を支援する県民ボランティアを組織化して発足。1999年のNPO法人化を経て、当銀行活動の企画・運営支援を核に、森林づくり体験や森林の恵みを活かしたクラフト・食体験の提供、水源地域との交流などに取り組む。会員数236名（2002年度）。

台風通過後のどんぐり銀行活動をサポート

2004年10月20日高知県に上陸した台風23号は豪雨被害をもたらし、高松市北部に位置するドングリランド*2にも土砂崩れや林道の決壊など大きな被害が生じました。このため今回予定されていた森の文化祭（下コラム）はやむなく中止。しかし当日、この文化祭を準備し、また心底楽しみにしてきたメンバーが、拠点施設ドングリランドビジターセンターに集まりました。

当センターでは来館者に様々な体験プログラムを提供しています。今日は木の円盤を素材にした鳥のマスコットづくりです。木工房担当メンバーが、「鉈を使うときは思い切って」、「目を入れると途端、人形が生きてきますよ」と要所で助言をしてくれます。鉈、小刀、木工用ボンドを使用して円盤の孤を活かしたパーツを組み合わせるだけで、15分ほどでかわいい人形が完成。こうした人形は持ち帰り時の破損の心配がなく、お土産にもぴったりです。余った素材の破片も、次のクラフト用に皆とっておきます。当日は文化祭の中止を承知でセンターへ遊びに来てくれる親子連れもあり、そうしたお客様へのプログラムもメンバーが対応します。

▲ 「鳥の体と尾をバランスさせて」

▲ 「森の動物園」シリーズ。

日程 ：2004年10月31日

集合・順次活動開始	10:00
参加者自己紹介	12:00
昼食．アンケート記入	12:15
作業再開・散策出発	12:50
キーホルダーづくり	14:45
後かたづけ	16:00
解散	16:30

参加者19名（内ｹﾞｽﾄ3名、県庁ｽﾀｯﾌ3名）

● 当日の分担・配置

木工作指導、道具整理、棚製作、散策ガイド、キーホルダー作成

● 使用した主な道具・物品

丸鋸盤、鉈、小刀、木工用ボンド、鉋、鋸、金槌、木槌、ノミ、七輪、炭、焼き印型、円盤

森の文化祭

森林や木材等森林の恵みの利用に関わる活動をしている団体・機関等（2004年度18組織予定）が集まり、活動の集大成を出展する年一度のお祭り。どんぐり銀行活動の一環として香川県と当会が共催で実施し、お客さんは参加料をドングリの通貨で支払う仕組みです。公共交通と連結する臨時バス「どんぐり号」を運行するなどアクセスにも工夫。工作、野外料理、競技大会といった体験型のメニュー構成が好評で、親子連れを中心に4,500人（2003年度）もの集客がみられます。

▲ 「どんぐり銀行」HPより。

＊1 70ページ参照。

＊2 クヌギ、アベマキ、コナラを主体とする落葉広葉樹林が大半を占める県有林で31ha。県民参加の森林づくりのメインフィールド。2004年度より当地で行われる市民活動の管理と企画運営業務を当会が県より受託。

階下の雨天作業場と倉庫では、整理棚作りと収納した道具の整理が行われています。ビジターセンターは2002年に完成したばかり。手作りで内装を整える作業が続けられています。

▲ 2段組の棚をつくります。

今日の活動は曇天に始まり、午後には雨が降り出しました。しかし「ぜひドングリランドを歩きたい」という県外からの参加者のため、センター周辺の安全な箇所を散策するツアーが組まれました。

ランドの森には「こぶし坂」、「ドングリ銀座」といった、地形や植生にちなんだ地名がつけられています。地名となっている植物の葉や花、実を探すことは、散策の楽しみ方の1つです。今年の森の文化祭では、散策路の各所に10会場を配置し、スタンプを集めるウォークラリーが計画されていました。ランドの早期の復旧がまたれます。

ビジターセンター横の苗畑では、銀行に「貯金」されたドングリの一部が、後の「苗木払い出し」や植栽行事に向けて育てられています。

▲ 苗畑でドングリを発芽させ、植栽できる大きさまで育てます。

ドングリ君のキーホルダーは焼き印で

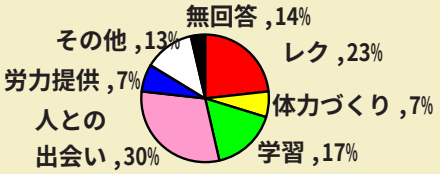
棚づくりを終えた雨天作業場では、木の円盤に焼き印をプリントする作業が行われました。円盤は来月のどんぐり銀行活動のイベントで使用するキーホルダーとなります。ケヤキ、ヒイラギ、ツバキの3種の樹種毎に、違った絵柄のドングリ君をプリントします。キャラクターは、絵本作家大滝玲子さんがデザインし、型はオリジナルのオーダー品です。「絵柄の線は焦がしすぎず、薄すぎず」、「結構難しいね」、「これは完璧にできた！」コツをつかんだメンバーによってドングリ君の円盤が次々量産されます。

文化祭の中止は残念でしたが、活動の現場ではメンバー達の熱意で今日もどんぐり銀行活動のサポートが着々と進められました。あらためて人の力の大切さを実感した一日となりました。

▲ 印は煙が出るくらいまで熱して。右から2番目が大滝さん。

参加者の声から

参加目的は（複数回答2,N=30）？



その他の内容
：自然を守る　　：本づくりの参考に
：森林に竹の家をつくり､ﾊﾞﾝﾌﾞｰｶﾌｪをやりたい
：森林づくりへの市民参加を支援

今日の目的達成度は（同右）？　自由記載から

［5段階評価］

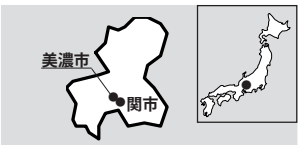
項目	達成度	人数	(%)
レクリエーション	3	2	7
	4	2	7
	5	2	7
体力づくり	2	1	3
	5	1	3
学習	2	1	3
	3	2	7
	4	1	3
人との出会い	3	2	7
	4	2	7
	5	6	20
労働力提供	4	2	7
	5	1	3
自然保護･ﾊﾞﾝﾌﾞｰｶﾌｪ	1	2	7
本づくり･市民参加支援	3	2	7
無回答		1	3
合計		30	100

「森づくりの作業をする人を増やしたい」
「体力に合わせた作業をし、活動を長く続けたい」
「参加者が活動の目的を十分理解し楽しみながら参加できる仕組みが大切」
「台風被害の修復のために、すぐに人々が集い、できることをやり出す会のパワーがすごい」

目的達成度4以上比率：57%

☆ 当日は人との出会いを目的とする回答者が最多で、この目的で高い達成感を得た回答者も多く、全体でも約6割の回答者が高い達成感を得ていました。

岐阜県立森林文化アカデミー見学・ふどうの森での架線運搬体験



岐阜県美濃市・関市

§ 全国雑木林会議

雑木林の保全、環境教育など、雑木林に関わる市民団体の情報交換などを主目的とするネットワーク組織。1993年より、毎年一度開催地を変えて、市民の手作りの企画・運営によって大会を開催。今大会のテーマは「－長良川で考える－雑木林な流域(まち)づくり」。岐阜県の多様な森を舞台に流域単位の森づくりについて考える。

森林に関わる人材育成の専門機関を見学

雑木林会議初日のエクスカーションはあいにくの雨模様で始まりました。参加者は傘を手に岐阜駅に集合、受付をすませてバスに乗り込みます。当エクスカーションでは「岐阜県の森づくり活動を体験」をテーマに、岐阜県立森林文化アカデミー（美濃市）の見学、ふどうの森*1（関市）での作業体験が予定されています。なんとか天候が持ち直してほしいところです。

アカデミーに到着すると、まず校舎の木造建築に目を奪われます。校舎の各所に見られる格子状の壁には、接合部に工夫が凝らされ県産間伐材が活用されています。本校は2001年度に開校した森林・林業・林産に関わる専門・専修学校で、スペシャリストとジェネラリスト養成の2コース、各コース20人2年制の体制*2をとっています。本校ではこうした少人数制で「プロジェクト教育*3」など、実践型のカリキュラムで教育が行われ、新たな森林文化を提案、創造できる人材を育成しています。

学校概要の説明を頂いた後は施設見学です。学生ホールでは、学生の木工作品が展示されています。本棚や食器などの作品は手に取ることができ、参加者は木の手触りを感じたり、玩具を試してみたり。作品はディスプレイの工夫も見事です。

次は屋外へ出て、2004年度に学生が主体となって建築した「風の円居(まとい)」を見学します。これはワークショップを行うための約8畳の施設で、内部には囲炉裏状の座卓があり、車座になってくつろげる空間が作られています。

日程　：2005年10月8日

集合・移動	10:00
森林文化アカデミー見学	11:00
ふどうの森へ移動	12:25
昼食・ふどうの森クラブ紹介	13:05
フィールド案内	14:40
ﾏﾂﾀｹ山解説・架線運搬体験	15:40
移動・参加者自己紹介	16:20
解散	17:00

参加者28名　（一般11、ｽﾀｯﾌ:ｴｸｽｶｰｼｮﾝ3・ｱｶﾃﾞﾐｰ4・ふどうの森ｸﾗﾌﾞ10）

● 当日の分担・配置

参加者：見学、架線運搬体験

ｽﾀｯﾌ:ｴｸｽｶｰｼｮﾝ担当；日程確認、進行、ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ説明、組織間連絡調整

岐阜県立森林文化ｱｶﾃﾞﾐｰ：学校概要説明

ふどうの森ｸﾗﾌﾞ：昼食交流会準備、架線運搬準備、会活動・ﾌｨｰﾙﾄﾞ説明

● 使用した主な道具・物品

熊手、剪定鋏（腐植層除去実演）、土嚢袋

▲ 格子状の壁で囲まれた廊下。

▲ 「風の円居（まとい）」内部。

＊1　生活環境保全林で約126ha。アカマツ・アベマキを中心とする二次林。「ふどうの森クラブ（次ページ）」はこのうち迫間地区大岩不動周辺の森林約9.5ha（所有は財産区・社寺・個人）で自然観察などの活動を展開し、うち約1haを整備対象地と設定して、マツタケ山の再生や棚田の管理、炭焼きなどの里山活動を行っている。

＊2　この他、本校には森林・林業関係者対象の「短期技術研修」、一般対象の「生涯学習」の2部門がある。

＊3　スペシャリスト養成科で行われる、地域に密着した実践活動（プロジェクト）による教育。例えば環境教育分野の学生は、地域の一中学校と連携して、中学1年生の1年間の総合学習を企画し、実際に授業を実施する。

ふどうの森で、架線運搬を体験

雨足が勢いを増す中、アカデミーを出発。10㎞ほどの道のりで、ふどうの森に到着です。昼食は「ふどうの森クラブ*4」との焼き肉交流会が企画されています。当会のメンバーは悪天候をものともせず、屋外に会場を設営して準備にあたってくれました。メニューには、会が栽培した黒米、シイタケも食材として加わり、会話が弾みます。採取した茶葉をあぶって煮出したお茶は、味わいのある優しい味がしました。このお茶は会で愛飲されています。

会の活動についてお話を頂いているうちに雨が止み、「ふどうの森めぐり」に出発です。5棟ある炭焼き小屋、シイタケ栽培と堆肥づくりの現場、トンボ池をスタッフが案内してくれます。

マツタケ山再生の現場（約50年生アカマツ林、約0.3ha）では、会が指導を受ける「岐阜県マツタケ研究会」の高井会長から、かつてこの山はマツタケの宝庫だったこと、そして「マツタケの再生には、林内の光条件を改善し、土壌上部のマツゴ（腐植層）を掻き出す整備が必要」といった解説があります。腐葉土としての商品価値もあるこのマツゴを、効率的に林外へ運搬する設備として当地に導入されたのが「じゃんじゃん索道*5」です。参加者は早速運搬を体験します。

「いくよー！」麓（ふもと）への合図とともにマツゴを詰めた土嚢袋から手を離すと、積荷は「ヒュー、シュルシュル…」と音を立てて索道を下降していきます。到着の様子を確認するために、一行は麓の広場に移動して、今度は下降する積荷を待ち受けます。

「ヒュー、ドーン（荷下ろし場で袋が落下する音）」、「うわぁー！」

積荷の予想外の速度に歓声が上がります。束の間の体験でしたが、里山の産物の循環利用について理解を深めることができました。

▲ この茶葉でおいしいお茶が飲めます。

▲ マツタケ山再生の現場にて。

▲ 「いくよー！」

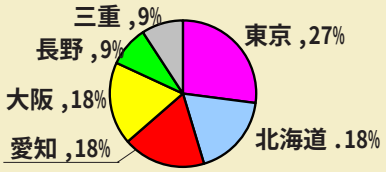
目指すは循環システムの構築：ふどうの森クラブ

当会の活動方針の1つに「循環型整備」があります。活動で得られた産物を有効に活用して、他分野の整備に役立てようという地域内循環の取り組みで、具体的にはマツタケ山の整備で採取した落ち葉や枝条で堆肥をつくり棚田に供給したり、間引いた竹で炭を焼いたりします。また、炭焼きでできた粉炭や竹酢液は土壌改良剤などとしてマツタケ山や棚田へ供給しています。会では、まずはこうした活動場所内での循環システムを実現させ、さらに「水の循環」、「流域」などを意識した、より広域での取り組みに拡げていきたいと考えています。

▲ 炭焼き小屋にて（屋根は竹製）。

参加者の声から

どちらから参加しましたか（N=11）？



今日の感想は（抜粋）？

「退職後にアカデミー入学を検討している。資料も沢山いただけてよかった」

「アカデミーを見学して、こういう生き方もあると提示されてしまった格好。考えさせられる体験だった」

「マツタケのでる手入れの仕方など参考になることを教えてもらえてよかった」

「索道が見たくて参加した。結構簡単にできるようで、自分のフィールドでもやってみたいと思った」

「雨降りでも楽しめたのでよかった」

☆ 全員が他県からの参加（但し岐阜出身者2名）で、アカデミー見学や架線運搬体験がよかったとの声が多く出ました。

＊4　1998年度、県の里山林整備リーダー講座の受講生等を中心に発足。県下里山クラブの先駆的な存在。現会員数60名。

＊5　ワイヤロープの索とポリプロピレン製滑車を使用した簡易な索道。滑車のフック部分に荷を吊すと自重で下降し、山頂から約64m離れた麓の広場に運搬される仕組み。160kgの荷重に耐える。全国的には「ヤエン」の呼称で知られる。

下刈り・つる切り

§ NPO法人 樹木・環境ネットワーク協会 聚（しゅう）

樹医らによる樹木保護活動を母体に、1995年メンバーを市民に拡げて発足。自然との調和を保つ社会づくりを目的に、生態系の正しい知識の普及の他、各地で雑木林など人の利用によって維持されてきた二次林の整備を行う。地元との連携を重視し、コミュニティの活性化にも力を入れる。会員数849(2002年度)。

コナラ林の萌芽更新区を手入れ

武蔵村山市は、狭山丘陵のふもとに位置し、立川市や埼玉県所沢市に隣接する人口6.8万人の都市です。当会は海道（かいどう）緑地保全地域*1にて「武蔵野の森で学ぼう」の名称で雑木林の手入れなどの活動を展開しています。今日の作業はコナラの萌芽更新区の下刈りとつる切りです。昨日からの雨は集合時間までにおさまり、今日は一日曇天の中での活動となりそうです。また今日は、地元自治会からの参加が5名、初参加者2名が加わっています。打合せを終えてメンバーは早速対象林分に移動します。

C区（約0.3ha）は2000年度の皆伐後３年半が経過し、母樹のドングリから成長した実生は1.2m程、切り株から成長した萌芽枝は背丈を越す高さになっています。林業経験者のメンバーから、コナラの周囲1m程を鎌で刈り払うこと、コナラにからみついたツル植物は根元を切り、木を傷めるのを避け無理に外さないことといったポイントが説明されます。鎌の安全な取り扱いを確認し、メンバーは横一列に並び一斉に前進して作業を進めます。

雨上がりの下刈り作業は、鎌を振るたびに葉の水しぶきが降りかかります。地面を這い長く伸びたツル植物を手繰る軍手は、すぐに泥で真っ黒になります。おまけに藪の中に隠れた蚊の群を追い払いながらの作業は、なかなか根気が必要です。

「毎年刈り続ければこのツルも少なくなるかな」
「なって欲しいねー」
「わぁ、サンショウのいい香り」

雨露にぬれた植物の色はひときわ鮮やかで、腰を低くして作業をしていると、まるで緑のトンネルの中に入ったようです。あたりには、シャッ、シャッとメンバーが草を刈る音が響きます。

日程	：2003年6月28日
集合・身支度・道具配布	10:00
挨拶・日程確認	10:15
C区作業	10:20
昼食	12:10
B区作業	13:00
ミーティング	14:00
アンケート記入	14:45
後かたづけ	14:50
解散	15:00
参加者14名（うちｽﾀｯﾌ1）	

● 当日の分担・配置
参加者：つる切り
リーダー：作業・ミーティング進行・フィールド掌握

● 使用した主な道具・物品
鎌、鋸、剪定鋏

▲ 作業のポイントを解説。

▲ 鮮やかな緑の中、作業を進めます。

＊1　都有林約8ha。皆伐などの施業は所管の東京都多摩環境保全事務所が実施。会では萌芽更新区を皆伐時期の古い順にA～D区と名づけ、区内の管理作業（次ページコラム）を行っている。

午後からは2002年度に皆伐されたB区に移動して同様の作業を続けます。B区の一部には、今年の春にC区から実生苗を移植しています。林内は午前中のC区と比べ、草の繁茂が少なく、作業は少時間で終わりそうです。植栽木の周りを丁寧に刈り払い、林内に見られるイヌツゲ、タラノキ、ノブドウやムラサキシキブといった植物も確認しあいながら作業を進めます。

▲ 作業の合間には植物観察も。

ミーティングで今後の活動を検討

作業後は活動予定や運営の懸案事項をメンバー皆で打合せます。こうしたミーティングはメンバーのまとまりをつくりフィールド活動の実行力を高めるために不可欠なものとして、月1回開催しています。話し合いでは、7～8月は外部講師を招いた植生の勉強会や調査などを集中的に行うことが決定。また、先日行った地元自治会に活動への参加を勧誘する説明会で協力的な反応が得られたこと、林内の野草の摘み取りや稚樹の踏みつけを防ぐ為に地元パトロールと連携してはどうかといった話題もあがります。最近の活動では、付近の住民から「今日もごくろうさま」と声をかけていただけるような状況も生まれきています。今後も雑木林への関心と保全の輪を広げていくことを確認してミーティングは閉会、今日の活動は終了しました。

▲ 昼食や野外ミーティングは道具小屋脇の広場で行います。

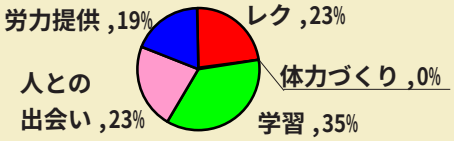
武蔵野の森で学ぼう：武蔵野の雑木林の再生を目指す

当フィールドでは、薪炭林として利用される中で生物多様性を維持してきた、昔の武蔵野の雑木林を再生することを活動の目標にしています。今回のような作業のほか、間伐・枝打ち、萌芽枝や実生苗の間引き、稚樹の保護柵設置などの管理作業を行っています。また林床植生の経年変化や、落ち葉掻きの有無が植生に与える影響なども調査しています。雑木林を維持する地元コミュニティの役割にも注目しており、その入口として、樹名板の設置やドングリ拾いなどの交流イベントも開催しています。

▲ 植生調査の様子*2。

参加者の声から

参加目的は（複数回答2,N=26）？

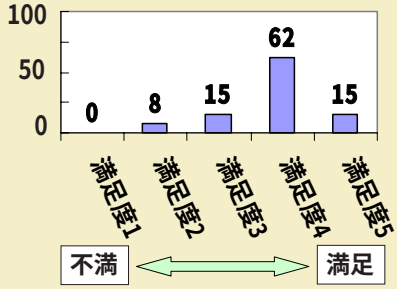


「交流の輪や参加者を増やしていきたい」
「森を環境学習の場に。地元の関心を高めることで、森でのマナー向上を期待したい」
「地元のやすらぎとなる森の姿を追求したい」

今日の目的達成度は（同左）？
[5段階評価]

項目	達成度	人数	(%)
レク	2	1	4
	3	2	8
	4	3	12
学習	1	1	4
	3	2	8
	4	5	19
	5	1	4
人との出会い	2	2	8
	4	3	12
	5	1	4
労力提供	2	1	4
	4	3	12
	5	1	4
		26	100

今日の満足度は（N=13）？

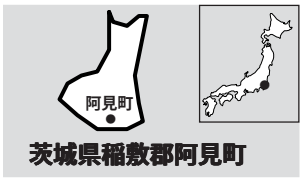


目的達成度4以上比率：65%
当日満足度4以上比率：77%

☆ 当日は学習を目的とする回答者が最多で、各目的の達成度、満足度とも4（中程度より高い）とする回答が最多でした。

＊2　会HP「武蔵野の森で学ぼう」より。

堆肥づくり・竹林間伐・炭焼き



§ いばらき森林クラブ

1997年、県の森づくり体験会の参加者有志により発足。県内6ケ所の固定フィールドにて、手入れ不足の針葉樹人工林の育林作業、里山整備と資源活用などを行う。キノコ栽培は部会をもち販売も行う。普及活動では2005年より県の後援で、会員らを講師に森林ボランティア育成講座を主催。会員数144(2002年度)。

放置された雑木林と竹林を手入れ

阿見町は霞ヶ浦の南岸に位置し、土浦市やつくば市に近接する人口4.7万人の町です。今日のフィールド、小池城址公園＊1では1999年度より町、県、当会の三者協定に基づき森林整備が進められています。今日の作業は、堆肥づくり、竹林の間伐、炭焼き、草刈りなど盛りだくさんです。メンバーは各担当毎、グループに分かれて作業を進めます。

公園北側のクヌギ・コナラ林では、今日は町の仲介で地元のボーイスカウトが堆肥づくりに参加しています。メンバーの指導のもと、子ども達は熊手や箒で落ち葉を掻いてビニルシートに集め、木枠で囲んだ堆肥場へ運び入れます。
「あ！、カブトムシの幼虫だ」、「わー、ほんとにいたー！」
落ち葉の陰のカブトムシの幼虫の周りには、たちまち子どもたちの輪ができます。この林では落ち葉を利用した堆肥づくりを進めた結果、予想以上にカブトムシが養殖し、夏期は成虫、今の時期は幼虫が多数観察できるようになりました。また林床にはキツネノカミソリなどの野草も見られるようになっています。

竹林では間伐作業です。公園東側の約1ha程の傾斜地で、整備開始時には直径約7cm、高さ10～15mほどのマダケが足を踏み入れないほど繁茂していました。会では目標密度を5m²あたり1本として、形質の良い太い竹を残す間伐を進めています。
竹は受け口を作らずに桿を鋸で一気に切り倒します。竹は木と比べて軽いため扱いは楽ですが、竹林内が過密なため、かかり木になりやすく、押してもしなるばかりでなかなか倒れません。地道な手作業が求められることに加えて、マダケの旺盛な繁殖力がネックとなり、竹林整備は会でも最も苦労している作業です。

日程	：2003年11月8日
日程・作業確認・作業開始	9:00
落ち葉掻き終了・焼き芋会	10:45
子ども達解散	11:15
昼食	11:45
作業再開	13:00
後かたづけ	14:40
アンケート記入	14:55
ミーティング	15:05
解散	15:15

参加者73名（会員16、町民3、ﾎﾞｰｲｽｶｳﾄ・引率者50、県2、町2、）

● 当日の分担・配置
会員・町民：堆肥づくり指導、焼き芋会準備、竹林間伐、炭焼き、味噌汁等調理
ﾎﾞｰｲｽｶｳﾄ:堆肥づくり、焼き芋会参加
ｽﾀｯﾌ:
運営委員；ﾌｨｰﾙﾄﾞ統括
町;スカウトら町民参加仲介
県;運営支援

● 使用した主な道具・物品
刈り払い機、鎌、鋸、鉈、箒、熊手、ビニルシート、炭材、燃材、調理器具

▲ 落ち葉を集めて腐葉土を作ります。

▲ 伐採の終わった箇所（手前）とこれからの箇所（奥）。

＊1 町有林約4ha。コナラやクヌギ、アカマツを主体とする林であったが、整備開始時には手入れ不良地、マツクイムシ被害地が広範囲に見られた。整備は県林試（当時）による「森林整備指針」をもとに実施（58ページ参照）。

刈り払い機担当は、公園中央の造林地周辺の草刈り作業です。ここはアカマツ林の枯損跡地で、2～3mの高さのアズマネザサが密生していました。会で継続的な刈り払いと野焼きを行った結果、3年ほどでアズマネザサは勢いを失い、代わって現在はセイタカアワダチソウなどの外来草本が侵入しています。1999年度に町民やボーイスカウトの参加を交えて150本のケヤキを植栽しており、夏期の活動は主にこの場所の草刈りが主となります。

▲ アズマネザサの勢いは衰えました。

間伐竹は竹炭と竹酢液として活用

炭焼き担当は、間伐したマダケを活用して簡易製炭を行っています。リサイクル材料を活用した会手作りのドラム缶窯を使用し、煙突部分にペットボトルを設置して竹酢液も採取しています。竹は窯の大きさに切りそろえ、四つ割にして窯にぎっしりと詰め込みます。点火後1時間ほどで燃材から炭材へと火が移り、もくもくと煙が出て炭化が始まります。1回の製炭で60kg程の材料から約15kgの炭ができます。今日は作業を終えたボーイスカウトをいたわる焼き芋会の準備のため、メンバーは炭焼きの傍ら焼き芋づくりに大忙しです。

▲ ドラム缶窯による簡易製炭。
今日は焼き芋作りも大忙し。

昼食ではメンバーが準備した味噌汁と焼きシシャモを堪能し、午後からは炭焼き担当以外は竹林整備に集中して作業を続けます。整備5年目目を迎え、当フィールドでは計画した森林整備はほぼ達成されつつあります。「全国育樹活動コンクール」（コラム参照）表彰式の報告もあり、地域と連携して森林づくりの輪を拡げていくことの大切さや活動の一層の充実を確認しあい、今日の活動は終了しました。

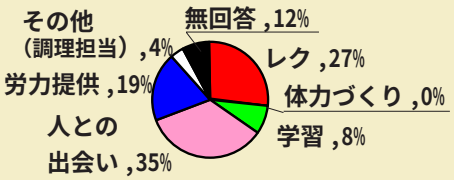
育樹活動で農林水産大臣賞受賞：「地道に弛（たゆ）まず」活動が評価

当会は当年度「全国育樹活動コンクール」団体の部で農林水産大臣賞を受賞、第27回全国育樹祭において表彰されました。小池城址公園の活動にみられるような地域と連携した森林整備の実践、県下全域での活動の展開など、これまでの実績が評価された結果といえます。表彰後、活動日に賞状と盾を手にしたメンバーは「やっていることは地道だけど、こうみると受賞はすごいことなんだな」としみじみ。「この勢いで若い会員には頑張って欲しい」との声もあがります。会は今後も新しい企画や新会員を増やして会を活性化させながら「地道に弛まず」をモットーに活動したいと意気込んでいます。

▲ 賞状と表彰盾。

参加者の声から

参加目的は（複数回答2,N=26）？



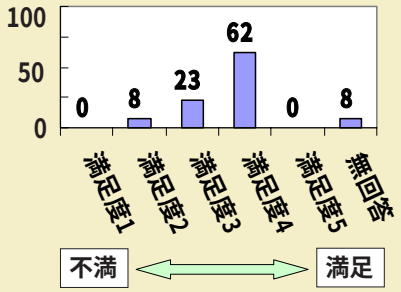
「里山や城跡などを残してフィールドを親子で楽しめる魅力ある公園に」
「活動にメリハリをつけていきたい」
「仕事始めに活動計画を検討するとよい」

今日の目的達成度は（同左）？

［5段階評価］

項目	達成度	人数	(%)
人との出会い	3	1	4
	4	4	15
	5	2	8
レク	4	4	15
	5	1	4
労力提供	2	1	4
	3	1	4
	4	4	15
	5	2	8
学習	3	2	8
調理担当	4	1	4
無回答		3	12
合計		26	100

今日の満足度は（N=13）？



目的達成度4以上比率：69%
当日満足度4以上比率：62%

☆ 当日は人との出会いとレクを目的とする参加者が多く、約7割の回答者が高い達成感を得ています。達成度の分布は満足度よりも高い傾向があります。

草刈り・NPO設立準備勉強会

埼玉県北本市

§ 北本雑木林の会

1991年、管理放置やゴミの不法投棄で荒れる雑木林を保全したいと住民有志により発足。「緑のまちづくり」を理念に、所有者、（財）北本市公園緑地公社と雑木林管理協定を締結し、雑木林の清掃、草刈り等の手入れを行う。雑木林の魅力を伝えるイベント、保全の必要性を訴える啓発活動にも取り組む。会員数55名（2002年度）。

市街地に残る雑木林を手入れ

北本市は中山道の宿場町の歴史を持ち、武蔵野の雑木林としてかつて一帯が林に覆われていたそうです。1970年代からの急激な都市化により宅地開発がすすみ、現在の人口は約7万人、高崎線沿線のベッドタウンとなっています。今日は、この市街地に残された雑木林、10号林*1の草刈りと、勉強会を開催します。

今日は今期2回目の草刈りですが、エノコログサやツル植物のカナムグラといった草本が膝丈程まで伸び、林床を覆っています。昨年植栽した苗木の下刈りをするとともに、特定の草本の繁茂や不法投棄の誘因となる藪の形成を防ぐため、フィールド全体を刈り払います。メンバーはカマと刈り払い機の担当に分かれ、早速作業に取りかかります。

鎌の担当は、植栽した苗木の周りを丁寧に刈ります。あわせて苗木にからみついたツルをたぐり寄せて、枝を傷つけないようにカマで切り離します。カナムグラのツルには小さなトゲがあり作業はなかなかやっかいです。林床には所々ツルが山のようにかたまって繁茂した箇所があり、メンバーは片手でツルを引っ張り、掻き出すように鎌をふるいます。

刈り払い機担当は、フィールド全体を刈り進めます。刈り払い機3台のエンジン音が響き、地面には刈った草の小山がどんどん増えていきます。10号林では2000年度から4年間こうした草刈りを継続した結果、アズマネザサの勢いはほぼ収まり、これに対応してゴミの不法投棄も殆ど見られなくなりました。

中央の広場では、調理担当が昼食の豚汁の準備を進めています。野外料理は毎回継続しており、活動の楽しみの一つです。

日程	：2003年10月19日
日程・作業確認・作業開始	10:00
小休止・挨拶	10:35
作業再開	10:40
昼食	12:10
NPO設立準備勉強会	12:35
アンケート記入	14:10
道具手入れ・後かたづけ	14:25
解散	14:40
参加者8名	

● 当日の分担・配置
今月の会長（輪番）：日程・作業分担確認
会長（会代表）：勉強会議案提出
会員：草刈り、豚汁調理

● 使用した主な道具・物品
刈り払い機、鎌、熊手、調理器具、長机

▲ 苗木の下刈りを進めます。

▲ ツルの山と格闘中です。

＊1 民有地0.17ha。「雑木林の管理協定」協定林の１つ（58ページ参照）。戦後に放置され、2000年度の手入れ開始当時はアズマネザサが繁茂し、大量のゴミが不法投棄されていた。キリ、クリ、サクラなど、残存する樹種よりかつては宅地と考えられる。2002年度、（財）北本市公園緑地公社から苗木の提供を受け、コナラとガマズミを20本植栽。

雑木林を守る手段として法人化を検討

▲ 汗をぬぐい、昼食の時間です。

▲ お茶を片手に気楽な雰囲気で、討議を進めます。

豚汁とおにぎりで一息入れ、午後は草刈りを終えてすっきりとしたフィールドでNPO設立準備勉強会です。この勉強会は、将来のNPO法人化を視野に入れ、必要な準備や組織運営の課題を会員皆で検討するもので、月１回の頻度で行っています。

まず会長から、私有地である雑木林の転用や消失をとどめるには買い上げや借り上げ、所有者から寄付を受けるなどの方法があり、会がそうした主体になるためには法人格が必要なこと、この実現には人材や資金、人を集める魅力的な企画などが重要であるといった話題が提供されます。メンバーからは、意識だけではなく実際に資金を負担し、行動してくれる賛同者を増やさねばならないこと、まずはあまりお金や人手をかけないで、雑木林体験やビオトープづくりの支援など地域の環境教育に役割を果たすことで理解者を増やしていってはどうかといった意見が出ます。会をPRする企画としては、ガーデニング教室や写真展、スライド会、若い母子対象のクラフト塾などの案があがります。また、既に取り組んでいる雑木林コンサートや中学生対象の草刈り体験で緑の大切さや会をPRする部分をもっと充実させては、といった具体的な改善案もあがります。

１時間半程の討議を経て勉強会は終了。作業でさわやかな汗を流し、意見交換を終え、内容の濃い一日となりました。

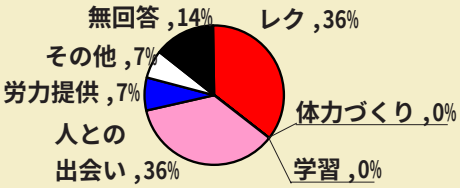
中学生にボランティア参加機会を提供：体験イベントから保全教室へ

会は（財）北本市公園緑地公社との共催で、市内４校の中学生を対象に、草刈り体験のボランティア・プログラムを提供してきました。休日の自主参加のイベントでありながら200人以上の生徒が参加するなど盛況でしたが、継続10年目を節目に2004年度から、各回20名程の少人数制による年４回の「草刈り教室」、「のこぎり教室（倒木処理など）」に内容を一新しました。道具の扱いなどの基本をしっかり習得できる体制を整え、中学生にボランティア参加の意義を理解し達成感を味わってもらうことが狙いです。中学生が熱心に作業に取り組む姿は、指導にあたる会の会員にとっても大きな励みになっています*2。

▲ 草刈り教室（2004年度）*2。

参加者の声から

参加目的は（複数回答２,N=14）？

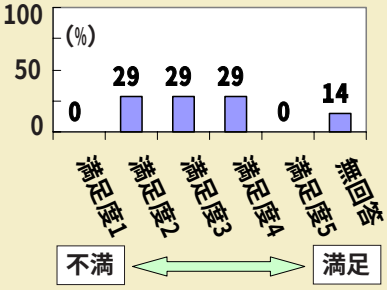


今日の目的達成度は（同左）？

［５段階評価］

項目	達成度	人数	(%)
レク	3	3	21
	4	2	14
人との出会い	3	4	29
	4	1	7
労力提供	3	1	7
その他	3	1	7
無回答		2	14
合計		14	100

今日の満足度は（N=7）？



「粘り強く活動を継続することが大事」
「コミュニティ、憩いの場として生物の豊かな林がほしい。今日のような話し合いの場をもっともつべき」
「人材を集めて活動を拡大したい」

☆　当日はレクと人との出会いを目的とする参加者が最も多く、参加者の２～３割が高い充足感を得ていました。勉強会に関連して組織運営に関する意見が多数でました。

目的達成度４以上比率：29%
当日満足度４以上比率：21%

＊2　会HP「中学生雑木林保全ボランティア」より。

補植・棚田管理

§ 桜ヶ丘公園雑木林ボランティア

1991年、都立桜ヶ丘公園を管理する（財）東京都公園協会のボランティア募集に応じた市民有志によって発足。以来、都立公園における雑木林ボランティアの先駆け的存在として、公園の雑木林と棚田の保全、里山の資源活用と文化伝承など活発な活動を展開。会員数74名(2004年度)。

皆伐更新地にコナラを補植

多摩市北東部の住宅地の中に位置する都立桜ヶ丘公園は、丘陵と谷間からなる約28haの公園です。会のフィールドは、この公園内の「こならの丘*1」と棚田です。拠点施設「ボランティアルーム」では「本日の担当」をつとめるメンバーの司会で、活動内容を打ち合わせます。

こなら班*2の今日の活動場所は、こならの丘L～N、Q～Sエリアです。コナラなどの上木の育成を重視し、下草を刈り取る薪炭林型の管理を行う区画です。当区画では1995年度に皆伐が行われ下刈りや除伐などをして萌芽更新を促していますが、加えて今日は、会が育ててきたコナラの苗木を補植します。「蒸散による苗木の枯死を防ぐために植栽前に苗木の細い枝を払うこと」、「根には土を付けたまま植え、しっかりと踏み固めること」といった補植作業のポイントを確認します。出席人数を勘案して午前中の植栽本数の目標を決め、作業に出発です。

苗木はイベントで使用するサツモイモと並んで、公園内の畑（会手作りで約100㎡）で養成されています。これらの苗木は「どんぐりの里親制度」によって育てられたものです。すなわち、会イベント「どんぐり祭り」に参加した子ども達の自宅でドングリを発芽させ、育ててもらいます。苗は次回のイベント時に子ども達と一緒に畑の苗床に植え替え、山出しできる大きさまで育ててこならの丘に植栽するという仕組みです。

メンバーは、スコップで苗木を次々と掘りとります。

日程(こなら班)　：2005年2月12日

日程・作業内容確認	10:00
道具搬出・こならの丘へ移動	10:10
苗運搬・植栽作業	10:25
施設へ移動	11:55
昼食．アンケート記入	12:05
こならの丘へ移動	13:00
苗運搬・植栽・間伐材搬出	13:10
作業終了・施設へ移動	15:00
後かたづけ	15:10
ミーティング	15:35
解散	16:00

参加者23名（会員22、ｺｰﾃﾞｨﾈｲﾀｰ1）

● 当日の分担・配置

会員：こなら班；補植、間伐材搬出
　　：田んぼ班；畦補修、コナラ植栽
　　味噌汁調理、ちらし印刷

本日の担当：出欠確認、道具確認、進行、作業記録作成、寄稿者選定、施設の鍵管理

ｺｰﾃﾞｨﾈｲﾀｰ：ミーティング出席、助言

● 使用した主な道具・物品

スコップ、唐鍬、剪定鋏

▲ 拠点施設で打ち合わせ。中央は「本日の担当」津村さん。

▲ 苗木は全部で65本あります。

＊1 50年生コナラを主とする雑木林で約2ha。会では林地をグリッド（20m×20m）に分けてA～Sエリアと名付け、エリア毎に樹種の構成や林床の状態を把握し、目標とする林の姿を定めて管理作業を実施（61ページ）。

＊2 会の作業には、林の維持管理と間伐材などの利用を行う「こなら班」、棚田の管理を行う「田んぼ班」がある。

苗木を運搬しながら作業エリアに到着です。補植する箇所は、赤いテープをつけたポールで事前にマーキングをしてあります。作業は2～3人でチームを組み、まずはスコップや鍬をふるって穴を掘ります。2月とはいえ、明るい日差しの中の作業は汗がにじんできます。苗木に盛った土を踏み固め、丹念に植え付けます。苗木の下枝は剪定鋏でカットします。

エリアには地面のあちこちにロープを張った方形の柵が作られています。この柵は、ドングリから発芽したコナラの稚樹を人の踏みつけや下刈り時の誤伐から防ぐための囲いです。

今日は午後も、この苗の堀取りと補植の作業を再度行い、植栽した苗木の南側の雑木を伐って日当たりを改善しました。また先月に間伐したコナラの玉切りを終えた材を、ほだ木用にキノコヤード*3に搬出しました。

▲ マークした箇所に穴を掘ります。

▲ 鋏で下枝をカット。右のロープは芽生えた稚樹などを保護する囲い。

畦を補修しコナラを植栽

田んぼ班は、棚田にて畦の補修、隣接する地滑り跡地へのコナラ植栽といった整備作業を行いました。

棚田

約1000坪。休耕田に谷戸田の景観を復元するため、1998年に畦の確認・整形、水抜き等の作業を開始しました。これら復元作業による環境の変化は、棚田の植生、昆虫、水棲生物などの調査からも確認しています。谷戸田景観の基本要素として2003年より稲作も開始し、今期は6升ほどの米が収穫できました。

▲ 復元開始当時（左）と現在（右）。かつては2mを超す葦原。

フィールド活動をサポート

会の活動は屋外ばかりではありません。両班がフィールドで汗を流している間、広報物の印刷や昼食のお味噌汁づくりといった役割もメンバーが分担して行っています。今日は、会企画「炭焼き実演」開催を地元自治会にお知らせするちらし400部を印刷し終えました。

ミーティング

日程の最後に今日の活動を振り返ります。作業の進行状況、申し送り事項などをメンバーで確認し、本日の担当が活動記録*4を作成します。コーディネイターの同公園管理事務所所長を交え、「炭焼き実演」のPR、来年度の新会員募集についても話し合われました。

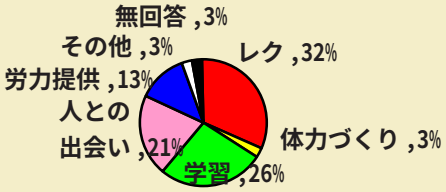
▲ 炭焼きをお知らせするちらし。煙や臭いに理解を求め、見学者も募集。

＊3 キノコ栽培実験区。コナラ、サクラなどの間伐材をほだ木に利用し、主にシイタケ、ナメコを植菌。

＊4 65ページ参照。

参加者の声から

参加目的は（複数回答２,N=38）？

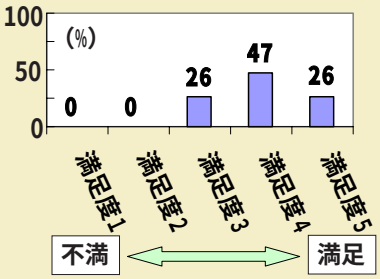


「思った以上に苗木の掘り起こしは大変だった」
「参加人数が多くなくても気持が揃っているから作業も捗る。質的に良い活動は出来る」
「久しぶりに参加して張りを得ることができた」

今日の目的達成度は（同右）？
［５段階評価］

項目	達成度	人数	(%)
レク	2	1	3
	3	3	8
	4	5	13
	5	2	5
体力づくり	3	1	3
学習	3	5	13
	4	5	13
人との出会い	3	3	8
	4	1	3
	5	4	11
労力提供	2	2	5
	3	1	3
	4	2	5
無回答		3	8
計		38	100

今日の満足度は（N=19）？



目的達成度4以上比率：50%
当日満足度4以上比率：73%

☆ 当日はレクを目的とする回答者が最も多く、約半数が高い達成感、約７割が高い満足感を得たことがわかります。

会員へのインタビュー＊5

「会が継続してきた理由とは？」

指導者・リーダーを固定しない

「毎回担当を変えることで、特定の個人のわがままがでにくい構造になっている。そのことを皆が意識している」
「一人だけが主導権を握るのではなく、皆でわいわいいいながらやってきたから」
「いい意味で平等で、内紛などが起きないシステムがある。かつて自分がボス的存在になりそうな時があったが、新メンバーの知識の不足は勉強して補えばいいのだから、後ろに引く様にした」

自主性が発揮されている

「各自が得意分野で立ち働き、全体として雑木林のためになることをやっている。自分が活動に対して役立っているという実感がある」
「指示待ちではなく、各自が考えて行動している。お互いに自分の知識や、技術を教え合うことが自然にできている」
「誰かに頼るのではなく、自分で考えてから行動しようとする人が多い」

こならの丘の存在

「目標となるフィールドがある」
「東京にしては豊かな自然があり、生き物がいっぱいいる。毎年繰り返しの様な作業も、積み重ねることで、木の成長が実感できるようになる」
「雑木林に愛着があり、それが盛り上がって雑木林を再生していこうという気持が高まってきたから」

東京都の支援

「都が面倒をみているという安心感の他、ある程度財政的なバックアップもある。コーディネイターとも仲間の様につきあえている。『都が後援している団体』ということで都広報での募集案内を見た一般都民が入って来やすい」
「拠り所となるような施設があることが、きちんとした活動が続くベースになっている」

＊5 （倉本ら，2004；桜ヶ丘公園雑木林ボランティア，2001）より抜粋、一部加筆。